

要旨

1. 研究の背景・目的

「OSS に置き換えることでシステムにかかる費用を削減できないか」「有償のソフトウェアを購入しているが、本当に必要なのか」「OSS が原因でトラブルが発生した場合、だれが責任をとってくれるのか」「何かあった時を考えると、企業が開発・販売している有償のソフトウェアのほうがよいのではないかなど、インフラ構築・運用に携わる方々であれば、前述したような疑問を自分で考えたことや上司から投げかけられたことがあるのではないのでしょうか。そういった疑問については、OSS や有償ソフトウェアの機能やサポートに関して調査を行ったとしても明確な回答が得られません。なぜなら、任意のソフトウェアを各企業が保有するシステムに導入しようとした場合、システムが担う業務や開発・運用の経緯を無視して導入することができないためです。また、ソフトウェアの機能は変わりませんが、当該ソフトウェアを導入するシステムによりソフトウェアの評価は変わります。

そこで、当研究グループでは、ソフトウェアの性質と導入先のシステムの特徴の両方の要素を含めて、より実践的に利用できるフレームワークおよびツールを提供することで、システムに携わる方々が適切なソフトウェアを選定するための支援を行うことを目的としました。

2. 研究内容・特徴

当研究グループは前述の目的に対して、オープンソース/プロプライエタリに限らずソフトウェアを評価するための評価表 (Software Rating Form、以下 SRF と記載) を作成しました。SRF の構成は以下の通りとなっています。

- ① ソフトウェアを評価するための評価軸 (開発、運用、情報量・サポート、将来性・安定性、費用の 5 つに分類)
- ② ソフトウェアの機能やサポートに関する評価項目
- ③ 点数を決めるための評価基準

また、SRF の評価項目には、ソフトウェア毎にあらかじめ点数が決まっている箇所と SRF を使用してソフトウェアを評価する企業の担当者が自身で点数を決める箇所があります。以下に例を挙げます。

- 当該ソフトウェアを使用した開発経験者・運用経験者を確保するためのハードルの高さ
- 当該ソフトウェアに関する自社内の設計ドキュメントの数量 など

あわせて、担当者や企業ごとに重視するポイントが異なることを考慮して、点数の比重を変更できるようにしています。(図 1 成果物イメージ)

要旨

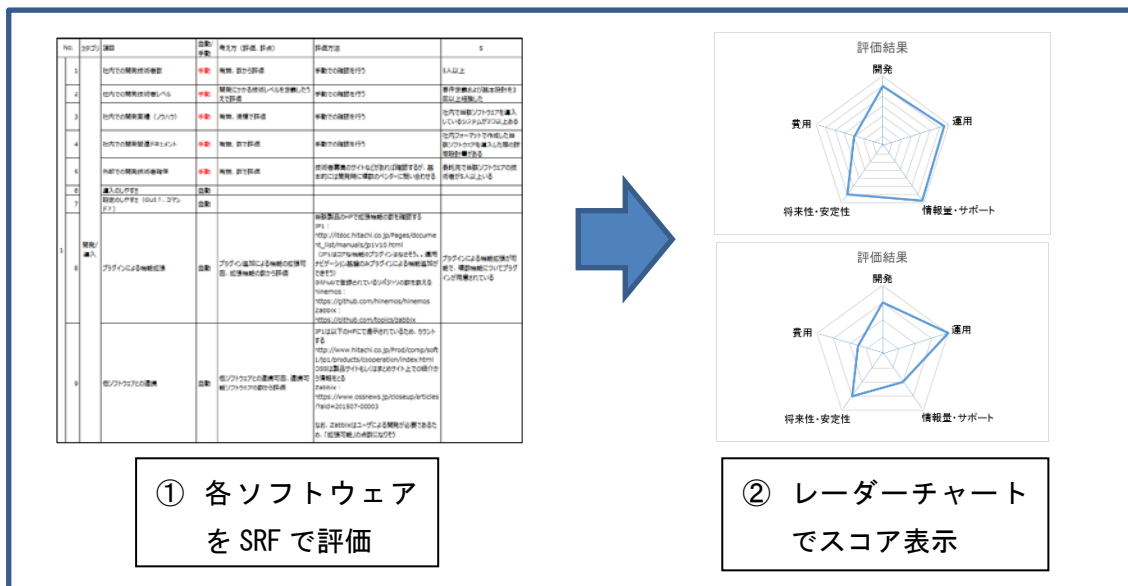


図 1 成果物イメージ

3. 研究結果

当研究グループでは、実際に SRF を用いて運用監視ツールとして分類されるソフトウェアを5つ評価しました。結果として、以下の効果が得られました。

- 複数のソフトウェアについて、導入先のシステムの特徴を踏まえた評価ができた
- 評価結果を定量化して見える化したことで、客観的な評価が可能になった
- 評価結果を保管することで、担当者が変更になった場合でも導入時にソフトウェアを選定した基準が明確になった

また、SRF を今後さらに有用にするために以下の改善点が明確になりました。

- 各企業内部で保管されている当該ソフトウェアが原因となったトラブルの発生数などをオープンにすることで、より精度の高い評価が可能になる
- 評価担当者が情報収集するために余分な工数がかかる

4. 総括

本研究はこれまで各企業のシステム担当者が実践してきたことを一定のフレームワークに落とし込むものであり、結果で示した通り一定の成果が得られました。しかし、ソフトウェアの採用実績やサポートにかかる費用などは企業間で情報が共有できる仕組みがない現状では SRF に反映させることができず、企業間の情報共有の仕組みの整備が待たれます。

* 文章内の記載の会社名および製品名は、各社の登録商標または各社に帰属する標章もしくは商号です。